

歴史・沿革

大溪李家の原籍は隴西成紀であり、宋代末期福建詔安県に移住し、十一世の先祖で李騰芳の曾祖父である善明は、清代の乾隆帝時期に台湾へ移住し、台南など各地を転々とした後、現の桃園大溪小角仔に定住した。その後、善明公の五男である先抓氏が月眉一帯で農地の開発に従事しており成功を収めた。しかし、先抓氏の早夭によって妻の廖湊が息子の炳生（李騰芳の父）、都生、振生の三人とともに困難な生活をしていた。後に炳生（1793-1862）は大嵙崁溪（現の大漢溪）水運の利便性を活かし、米穀の業者として艋舺、滬尾の間に往復して出荷販売の取引を行う。一方、都生が精米の生産に勤め、振生が使用人を同伴し農地で耕作の監督を行う。やがて、家業が盛んになり、大溪の「上街」でも「下街」でも李家の店舗が立ち並んできて盛況を呈していた。家号は「金興」である。

李騰芳（1814～1879）は炳生の三男で、本名は有慶である。清皇帝から官章をうけ、「騰芳」と呼ばれるようになった。騰芳は1856年に四十三歳で秀才に合格し、1859年捐納し貢生に登用され、1865年には21位として舉人に受かる。このため、現在の邸宅の方角や、外觀色彩、外堀での旗杆座及び夾杆石という施設設置などは、舉人邸宅としての規範を反映するものであり、家族や地元の誇りとしての表徴である。

李邸の建設経緯について、邸宅は1860年に着工し、1864年に完成した。現在は桃園市での国指定古蹟であり、現存する台湾民家を代表する十大民家の一つでもある。



心田存一
世事讓三
子種孫耕
先世傳家
惟忠惟孝

廳堂の対聯

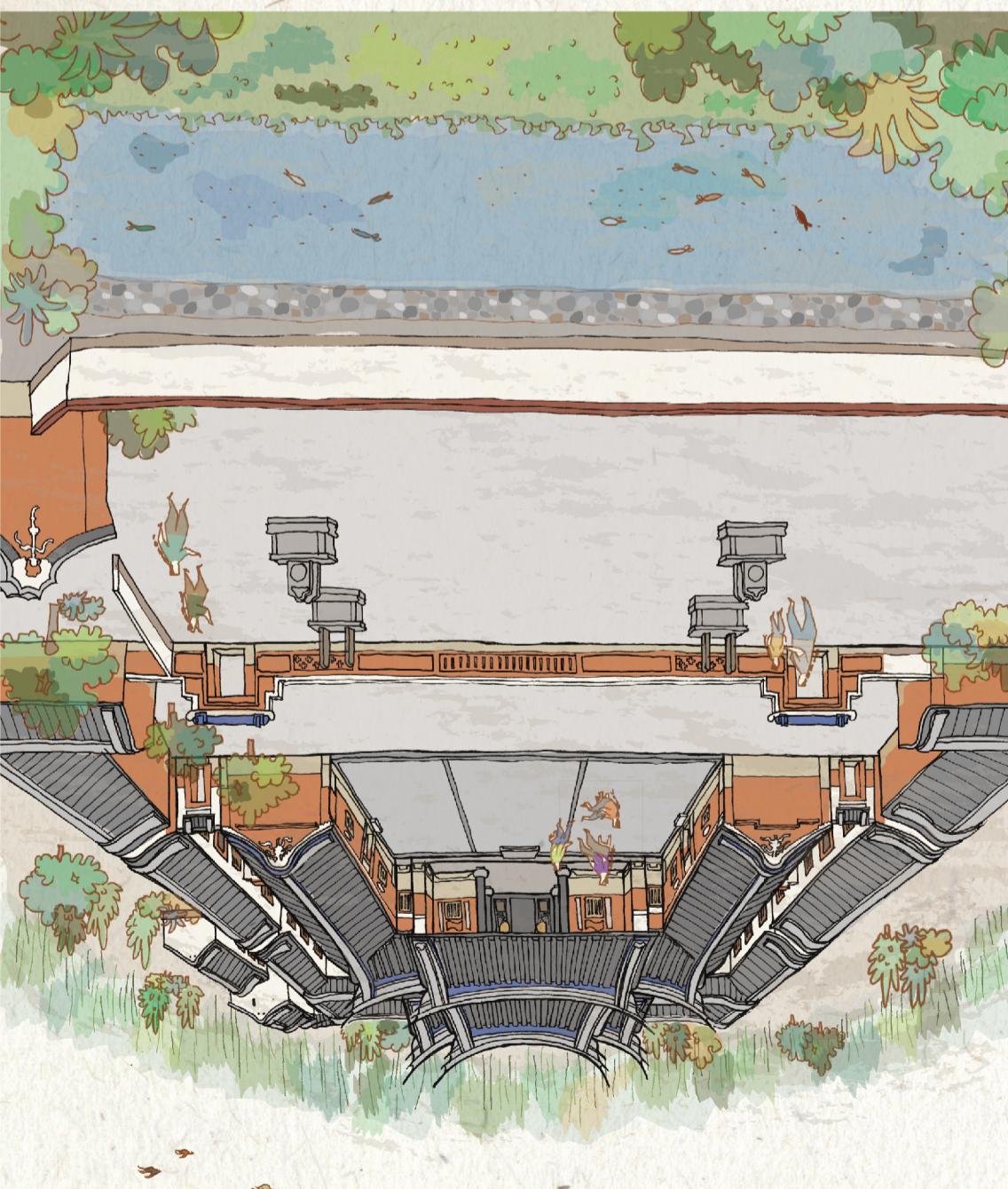
後人續諸宜儉宜勤

建築の特徴

李邸は空間配置として四合院の概念に基づいたものであり、さらに拡大し正面の両側に「護龍」を加え、外庭を囲んだことで「兩堂四護龍」の形式としている。主要空間を中心軸に配置しており、中で最も高い建築は精神的な空間「廳堂」である。また、入口門廳は二番目の高さであり、生活空間である護龍とともに中庭を囲んでおり、建物の中核を形成した。各空間の床面及び屋根の高さは、「後から前へ」、「内から外へ」、「左から右へ」徐々に下がっていることは、礼教の概念に基づいて、空間的な尊卑秩序を表されている。

中庭を中心とする門廳と、廳堂、南北廳の建築主体の屋根に、ツバメの尻尾のような形をしている「燕尾翹脊」という大棟の構造が六つのペアある。それと五行の概念に基づいた馬背式屋根のある建物が互いに映えている。建物は、全体として赤レンガと、黒瓦、黒柱によって構成されており、配色の意匠も「紅宮、烏祖厝」という「礼記」の教義に基づいている。それに、詔安での客家建築特有の白壁と、屋根または垣に飾られる線状の花紺青の色が加わることで、舉人邸宅に素朴で渋い性格が引き出されている。

インテリアについて、細緻な木製の建具と室内に掛けられる掛け軸などからは文人居住の様子が伺える。掛け軸や絵巻物には、科挙で登用された際の慶事や、後世に伝えたい教えなどが描かれたり、記載されたりする。ということで、木彫刻、壁画、字絵などは、みな芸術性として高い水準を持つため、参観の際に見逃してはならないところである。



李騰芳邸

主 要 | 住所 | 大溪區大漢路198號32號
電 話 | 03) 3888600
開館時間 | 平日9時30分～午後5時
休館日 | 例假日、大晦日及正月(日曆)。
行 程 | 不定期休館
其 他 | 本館、地下庫、及各展覽室開放時間依循於各項活動之行館時間為主。
其 他 | 開館時間依循於各項活動之行館時間為主。

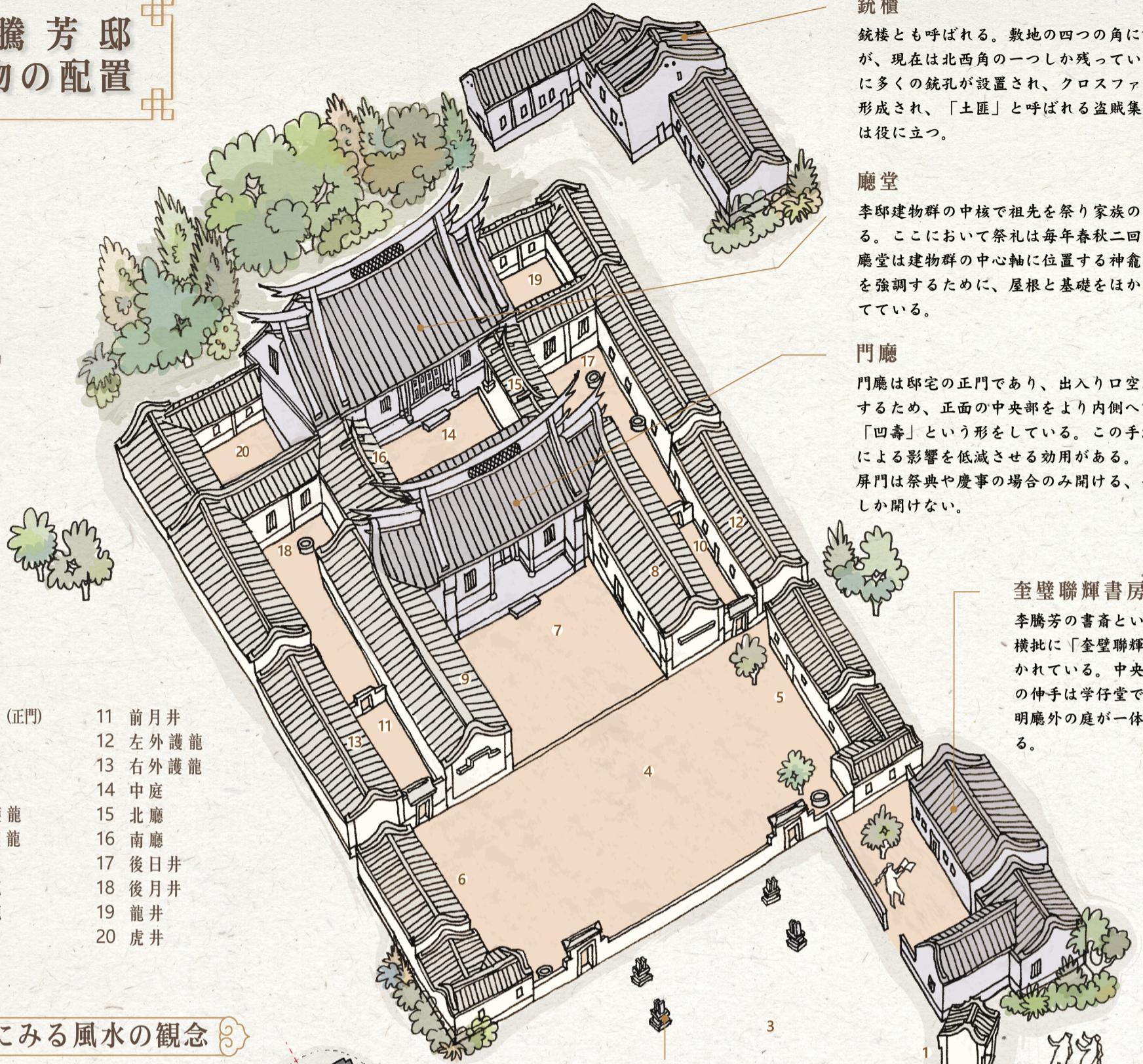
其 他 | 開館時間依循於各項活動之行館時間為主。
其 他 | 開館時間依循於各項活動之行館時間為主。
其 他 | 開館時間依循於各項活動之行館時間為主。
其 他 | 開館時間依循於各項活動之行館時間為主。



李騰芳邸
國定古蹟 · 桃園大溪

李騰芳邸 建物の配置

- | | |
|-----------|---------|
| 1 左院門(正門) | 11 前月井 |
| 2 右院門 | 12 左外護龍 |
| 3 外堀 | 13 右外護龍 |
| 4 内堀 | 14 中庭 |
| 5 左外護龍 | 15 北廳 |
| 6 右外護龍 | 16 南廳 |
| 7 外庭 | 17 後日井 |
| 8 左護龍 | 18 後月井 |
| 9 右護龍 | 19 龍井 |
| 10 前日井 | 20 虎井 |



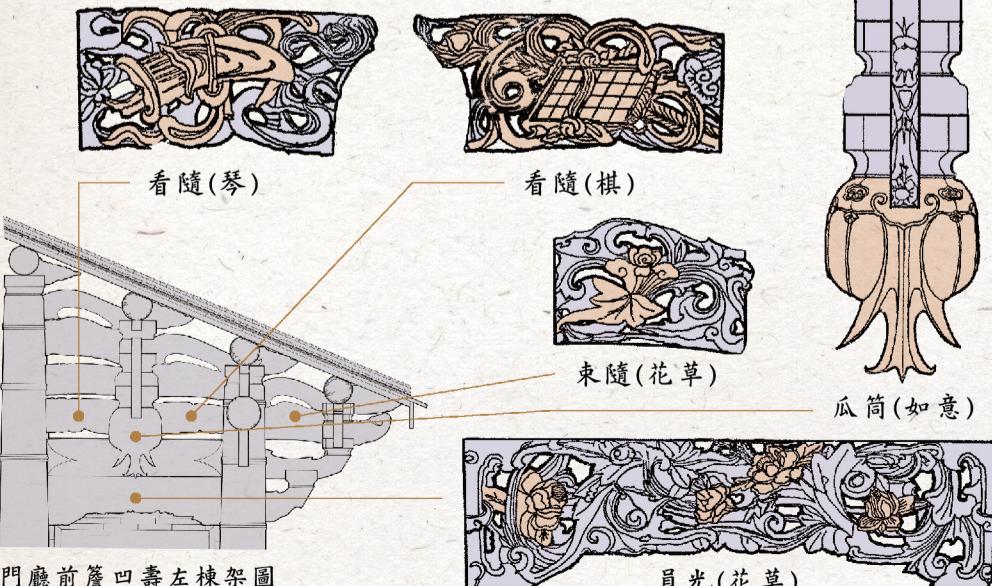
配置にみる風水の観念

大溪月眉李邸の中軸線は、12度の南南東の方位に向かい、李騰芳の文昌位にあたると言わわれ、邸宅の北向きの一般的な観念とは違うのが特徴である。敷地の周辺に竹林がある。竹林は建物群を囲んで橿円形の敷地の形をしている。それは「天円地方」の観念に基づいた配置である。竹林は現存しない。

木彫刻

木彫刻は李邸の一つの注目点である。数が多く工芸が高い木彫刻は、花鳥をテーマにしたものが多く、中には縁起のいい伝統模様が飾りとして飾られる。中心軸に位置する主要空間では、小屋が「抬槻式」の構造であり、表面に彩絵と彫刻が飾られることで立派なイメージが伝わる。一方、生活用空間の装飾は控えめにしている。

門廳の架構は最も立派な「抬槻式」を構造にした。入り口の「四壽」という架構に複雑かつ華麗な彫刻がほどこされる。なかでも、琴、棋、書、劍の模様が架構両側の「看隨」に、如意頭飾が瓜筒に、また各部に花草や縁起のいい模様が飾られるというように、細緻な彫刻は木造の小屋の強さを引き立てる。



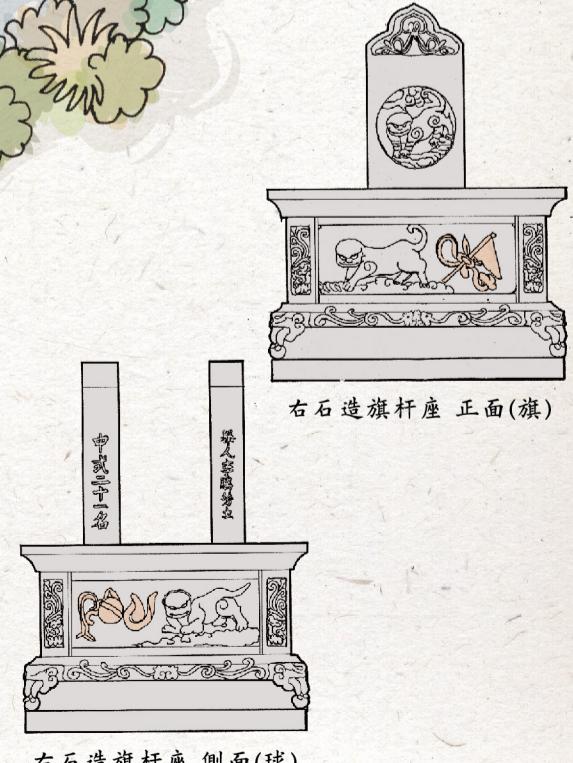
旗杆座

旗杆座は外堀にあり、手前の石造と後ろの木造のいづれもペアであり、挙人邸宅でもっとも代表性のある建築要素である。



旗杆座と石彫刻

外堀広場の真ん中で、ツーペアの石旗杆座があり、石には「同治四年乙丑補行甲子正科立」と「中式二十二名中舉李騰芳立」という文字が刻まれている。科挙合格の年代、科別、順位が示され、家族と地元の榮誉を象徴するものである。旗杆座にレリフがあり、「祈、求、吉、慶」を意味する「旗、球、戟、磬」と、「虎、豹、獅、象」の模様が主である。また、台座の四角は「螭虎吞脚」の図絵で飾り付けられた。



銃櫃

銃樓とも呼ばれる。敷地の四つの角に設置されていたが、現在は北西角の一つしか残っていない。銃櫃の上部に多くの銃孔が設置され、クロスファイア的な防御網が形成され、「土匪」と呼ばれる盗賊集団の侵入を防ぐには役に立つ。

廳堂

李邸建物群の中核で祖先を祭り家族のための空間である。ここにおいて祭礼は毎年春秋二回実施する。また、廳堂は建物群の中心軸に位置する神龕の崇高性と重要性を強調するために、屋根と基礎をほかの建物より高く建てている。

門廳

門廳は邸宅の正門であり、出入り口空間の重用性を強調するため、正面の中央部をより内側へ凹むようにし、「四壽」という形をしている。この手法にも廳堂の外部による影響を低減させる効用がある。門廳と中庭の間の屏門は祭典や慶事の場合のみ開ける、普段は両側の小門しか開けない。

奎璧聯輝書房

李騰芳の書斎という説がある。楣の横批に「奎璧聯輝」という文字が書かれている。中央部は神明廳で、横の伸手は学仔堂である。両部屋と神明廳外の庭が一体になり独立している。